

賀状から

こうち
河内愛子

計報の重なる新年であった。

思いは十六年前にさかのぼる。私の夫は、二〇〇一年十二月二十四日、世のにぎわいの始まりかけるクリスマス・イブの夕方、二ヵ月間の意識不明のあと、息絶えた。葬儀は成り行きで年末になり、死亡通知を年内に送る余裕はなかった。年が明け、夫には例年と変りなく年賀状が届いた。おめでとの挨拶を見るのは苦痛だった。それでも我慢して私は、彼の遠くの友人、知人、昔の教え子たちに、彼がこの世を去ったこと、今の自分に世界は氷のように砂漠のようにしか思われないことを、印刷して送った。それにしても、何の悪気もなく、知らずに人は人の心を傷つけることがあるのだった。翌年から私は年賀状をやめた。といってその功罪を認めぬわけではない。便りは全く書かないが、年賀状だけはきちんとよこす知人はいくらもいる。無事生きている証拠だ。自分はまだ忘れられていないこともわかる。珍しく賀状がこない人が心配になって、電話で理由を尋ねることもあった。だから私は、年賀状は一枚も出さないが、知人からののがきに、返事だけは書いてきた。行きあたりばったりの返事だが。そのせいか、新年がくると、持ち重りするだけの賀状が、

ちゃんと届くのである。

今年も同じだった。ただ例年とちがっていたのは、心痛むはがきが二枚も入っていたことだ。一枚は一月三日になくなった若い友人の男性からのもの。彼が年末にそれを投函したことは表書きでわかる。何枚出したのか？ ただここに書くのは、彼のことでない。

もう一枚は山形に住む夫の教え子だった男性の手書き。この人も若い。(私よりはね)

彼、武内徹君は、学生時代は新聞部でそのころ夫が顧問だった。地元の銀行に就職し定年退職後の年賀状には、毎年彼が登った山の写真のついていた。元気な明るい人だ。そして必ず「御無沙汰しています。そのうちお訪ねします」の添え書きがある。ただし一度もきたことはない。私は気にしなかった。夫はもういないのだし、好きなこと沢山で人付き合いの良い彼はもちろん忙しいにきまっている。あっさりと返事を書き、彼と同じように、私も彼を忘れた。

しかし、一つの人生がぎりなく続くわけではない。いつもとちがいで、今年の彼の賀状は細かいペン字が紙面をびっしり埋めていた。『夢幻のこの一年余』に彼をおそった病気が並んでいる。骨折、肺癌、心筋梗塞、胆のう炎、そして癌の転移、いのちに関わる病気ばかりとしても特に珍しくはない。がっちりした彼のことだから闘うつもりなのかと思っただが、最後にこう彼は書いていた。今年が満八十歳になる。抗癌剤は使わず、これまでと変らぬ生活をする。なお金品のお見舞いの儀は固く固く遠慮申し上げる。明るくない年賀状ですみませんと。

まさか。でもこれは彼の別れの挨拶ではないのか。せいっぱいの。十年以上、彼には会っていない。浮かんでくるのは、卒業後の半世紀近く、彼がかつての新聞部の仲間を誘っては夫をよろこばせてくれたことばかりであった。そうだ、それは私も幸せに思ってもらったということだ。この賀状にこそ、自分は返事を書くべきである。だが何と？

この一年、何も知らずに、過ごしてしまいました。不安で苦しいことも沢山おありだったことでしょう。おうちはほっとしますね。心も身体も少しずつ安らぎが眼をさましてくれますよう念じています。　　こうちあいこ

吹雪の日が続く。日毎に気温が下がっていく。最高気温がマイナス3℃だったりマイナス4℃だったり。としよりと病人にとつては魔の季節である。生命のせとぎわにいる徹君に、奥さんは優しくしてあげているだろうか。会ったことも噂を聞いたこともない家族だからよけいに気になってしまう。ユニセフのポストカードの買いおきがある。花の小枝に二羽の小鳥が向きあっている、孫さんがいたら喜びそうな絵柄にまた書くことにした。

ひどい雪降りです。お部屋は暖かいですが、外の寒さはどうしてもこたえますね。でももう少いで春です。その時はお友達の方の中に入れて頂いてお見舞いに行きます。平安を祈りつつ。　　こうちあいこ

言葉は空しい。自分のためにこんなはがきを書いているのである。彼あてではない。

一月十九日、高校、大学、新聞部も一緒に会社も地元だった彼の親友・椎野君から、今朝徹君がなくなつた、葬儀は二十二日と連絡がきた。涙でとぎれとぎれの声、八十歳の男性が友達の死に涙を流すことには感銘があつた。相変わらず私は、彼の友達でもなく特に親しかつたのでもない、ぐずぐずしたが、椎野君は有無を言わさず新聞部仲間だったまきさんを迎えるよこした。型の如きお弔いの後、私は今日が初めてで最後であろうと思える奥さんに挨拶した。「淋しくなられますね」と一言だけ。その人はやせて、やつれていた。夫の葬送時、ほとんどの妻はやつれている。看護疲れと心労で。

「三日前におはがきをいただき、黙って眺めておりました。ありがとうございます」

と彼女は頭を下げた。不意に心が軽くなつた。私が彼をずっとありがたく、なつかしく思っていたこと、生き続けてくれるよう願っていたこと、多分彼には伝わったのだ。そして奥さんにも。好きなこといっぱいして、どこでも友達つくつて、彼はきつと静かに回りと別れていったのだ。徹さん、いっぱいありがとう。心の中で初めて私は彼に話しかけた。